

## 父の書架

福間明子

晩春の書齋にはうつすらと黴がはびこり  
ひっそりとして その静けさの中に侵入する  
主がないとはこういうことかと思ひながら  
いない主を探しているわたしだった  
「その名を水に書かれし者 ここに眠る」\*  
父の愛したキーツの本がずらりと並んでいる  
生前聞いたイタリア旅行の話をおぼえている  
ローマのスペイン階段のそばのキーツ館  
病療養中に住んでいたという館の寝室のこと  
残されたキーツのデスマスクのことなど

今思えば内なる魂のありようを問われていた  
通り過ぎていった声の先には表現のありようを  
わたしは父に問われていたのだ  
デスマスクの存在は死後に他者によってとられる  
「わたしの死はわたしのものではない」\*  
デスマスクの前で父はキーツに何を問われたのか

小さな額縁の父が描いた桃の絵が掛かっている  
やわらかな風合いの桃の実ひとつ  
わたしが食べますと言ってしまいそうな絵  
桃色とはこんなにも美しいものだったのか  
「こんな風に世界は終わる」のフレーズの  
T.S.エリオットの詩集を選んで持ち帰った

\*キーツの墓碑銘

\*岡田温司著「デスマスク」から